

第13回漢字小委員会における検討事項

<本日の論点：前回の検討事項の継続審議>

1 「新常用漢字」の選定に関することについて

(1) 漢字の選定をどのように進めていくのか。

→「読み」「書き」というのはいったん外して、それから、教育というのも外して、いわゆる日常生活で今、情報化ということも入ってきて、今の実態から見てどの漢字が「使う」という意味で必要なのかを見ていく。それが千幾つなのか二千幾つなのかという中で、これは本当に読んで書けなければいかん、これは実態的には読むだけでいいなどというものがあるなら、それはそういうふうに分かれるであろうし、すべて読み書きが必要だということになるなら、それは分ける必要がないというシナリオもあるのではないか。

(2) 大きな目安として2,000字程度の漢字集合を考えたらどうか。

→準常用漢字という枠組みが必要になるかどうかは漢字集合全体の大きさによる。

(3) 頻度数などとは別に<日本人として、読めなければならない漢字>というのがあるのではないか。

→具体的にはどのような漢字が該当するのか。また、どのように選定するのか。

→「標準漢字表」の「特別漢字」のような枠組みを考えたらどうか。

2 「読めるだけでいい漢字」と「読めて書ける漢字」について

(1) 漢字が「書ける」、「読める」とは、具体的にはどういうことを意味するのか。

→「書ける」「読める」のレベルの問題をどう考えるのか。

(2) 書けなければいけない漢字をどのように選定するのか。

→どれだけの漢字が読めなければならないかというのは、種々の調査で割と浮かび上がってくるだろうと思う。それに対して、どれだけの漢字が書けなければならぬかというのは難しい。

→A：漢字の出現頻度数が多く、日常生活でよく使われるもの。

B：漢字習得の観点から、例えば漢字の構成要素を知るための基本となるもの。

(3) <A：読めるだけでいい漢字>と<B：読めて書ける漢字>のイメージ。

→基本的に「①読める」「②書ける」「③分かる」という3要素で考えたらどうか。

(Aは①と③の条件を満たすもの、Bは①、②、③の条件を満たすもの。)

(4) 漢字を「使える」というのはどのようなことか。

→「書ける」という意味では、今、ここで使うのはどの漢字が正しいかという問題もある。「検討する」を「見当」と書いてしまうようなことは字そのものの問題ではなくて、ここに何をを使うかの問題である。これは「読める」とはちょっと違う、どちらかと言えば「書ける」方に属する問題で、あえて言えば「使える」という問題なのかもしれないが…。

→上記の意見は「③分かる」という要素の内容と考え、「使える」とは、「①読める」「②書ける」「③分かる」の3要素のうち、最低でも、①と③の条件を満たすものと考えことにしたらどうか。

(5) 必要な漢字調査についてどう考えるか。

→漢字を一つ一つの単字でとらえるだけでなく、<語レベルの問題>としてとらえていくことも重要であり、そのための調査資料も参照する必要がある。